続　：　クリ取りＤＸ

ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
　このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

続　：　クリ取りＤＸ

【Ｎコード】

Ｎ１３２１Ｔ

【作者名】

ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

【あらすじ】

　あるメーカーが発明した家庭でのクリトリス切除道具、クリ取りＤＸを使用し、思春期を迎えた少女に切除を施す専門家たちを追います。前篇と同様、結構残酷な描写を予定していますので、ご了承下さい。

クリ取りマスター誕生（前書き）

この小説は『クリ取りＤＸ』の続編として書いていますので、まだお読みでない方はそちらからご覧下さい。

クリ取りマスター誕生

とあるメーカーが発明した家庭での性器切除セット、クリ取りDXは僅かではあるが全国の家庭で使用されていた。数百人に1人程度の割合ではあるが、実の親から大切なクリトリスを奪われるかわいそうな少女がいた。短時間で確実に切ることができる鋭く細かい刃物をはじめ、前後の消毒やテーピングまでもが一式そろっており、且つ実際に切除している写真を大きなサイズで載せていたから、素人が施術してもミスはほとんど生じなかった。しかし、ごくごく数件であるが、やはり素人がやるということで失敗例もある。

一番起こりうるのは痛みと恐怖で暴れてしまい、クリトリス以外の部分を傷つけてしまうというケースだ。中には小陰唇や膣を傷つけてしまった例もある。あるいは止血が不十分につき、傷口が化膿したなどの問題もあった。これらの事実が発覚するたび、人権団体は強烈に非難した。そのような流れを受けて、クリ取りDX誕生から半年が過ぎた頃、この道具を使って切除を行う専門家が現れた。クリ取りマスターと称された専門家グループは2~3人の女性から構成されている。普段は個々の仕事をしている彼女たちが、家庭から委託を受けるとその都度チームを組んで切除に向かう。中心となるのは医師や美容師などが主に登録されている切除者である。彼女たちはチームのリーダーであり、実際にクリトリスを切る役目である。そもそもこのグループの事務局はクリ取りDXを開発したメーカーにおかれている。切除者には、念入りな研修が施されていた。決して他の箇所を傷つけず、クリトリスだけを確実に迅速に切り落とすのが任務である。クリトリスと同じ組織で作られた人体の模型を使い、何度も実習を繰り返していた。その補佐役となるのがスポ

ーツ関係者が主に登録されている押さえつけ役である。暴れないようにしっかりと固定させておくことが任務である。切除者1人と押さえつけ役1人または2人がチームとなり、小学4年から中学3年までの少女がいる家庭を訪問し、施術を行った。1回にかかる時間は準備・片付けを含めても1時間足らずである。

この物語ではクリ取りDXを使い、少女のクリトリスを切ってまわる専門家に焦点をあてる。

クリ取りマスター誕生（後書き）

是非ともコメントと評価をお願いいします。特に意見を聞いて次作に反映させたいと思います。

桂子の悲劇

活発で友達の多い桂子はクラスでも人気がある。誰にでも優しく、成績もスポーツも標準以上という模範的な少女であった。中学生になり、テニス部に所属した。桂子の通う中学校には設備がととのったテニスコートがあり、毎日学校が終わると汗を流していた。桂子の家は両親と3人暮らしである。父は仕事が忙しく、平日は21時を過ぎないと帰ってこない。休日も接待ゴルフが入ることも多く、桂子の教育はほとんど母任せであったが、時間がある限りは娘とのコミュニケーションを楽しむ父であった。思春期を迎えた桂子もそんな父のことが嫌いではなく、たまの休みには父娘で人気グループのライブに行くこともあった。専業主婦の母は桂子のことを深く愛しており、習い事などには際限なく投資をしてきた。一方、ヒステリック且つ心配性という一面があり、桂子が言うことを聞かなかった時は遠慮なく平手打ちを見舞わせ、長時間ベランダに出すこともあった。習い事で遅くなるときはいつも車で迎えに行き、外泊は絶対に許可しないというポリシーを持っていた。

中学生になった桂子に対し、母は門限5時半という不理屈なルールを押し付けた。5時半といえば、部活が終わってすぐに着替え、寄り道をしないで一目散に帰ってきて間に合う時間である。母の中ではそれが当然だった。しかし桂子も友達を大切にする年頃であるから、片付けに最後までつきあったり、あるいは寄り道をしてしまうこともあった。5時半を少しでも過ぎると母は激しく怒り、正座1時間・夕食抜きなどの罰を与えた。更には部活をやめさせると迫り、ある時はスカートとショーツを脱がせて靴べらで何回も尻を叩いた。まだ生理を迎えていないとはいえ桂子も中学1年生、女らし

く少し丸みを帯びてきた尻を丸出しにされ、叩かれることは同性の母といえ辛かった。

それは桂子が中学1年生の10月だった。秋風が涼しくなり、テニスをするのに最高の季節だった。その日も心地よい汗を流した桂子は、仲間と共にグランドを清掃して学校を出た。帰り道、仲間の1人がファーストフードに寄っていかないかと提案した。今、桂子たちクラスの女子が熱中しているロックグループのライブに行ってきて、レアなものを手に入れてきたという。桂子は母の怖い顔がよぎったが魅力には勝てず、仲間との時間を過ごした。そして6時ちょっとすぎ、恐る恐る自宅の玄関を入った。案の上、母は待ち構えていた。言い訳をしても鋭い母にはすぐばれてしまうので、桂子は正直に理由を打ち明け、謝罪した。母は桂子の頬に1発ビンタを浴びせると、制服のまま1時間正座を命じた。

その翌日、今度は門限に帰宅した桂子に母は、「明日の金曜日は夕方から用事があるから、5時には必ず帰ってくるように」と告げた。元々翌日は秋休み前最後の日であり、授業が短縮されるため部活も時間を繰り上げて行うことになっていた。土曜日から翌週の水曜日まで、学校は休みとなり部活も活動しない。何も知らない桂子は、素直に返事をした。この時、母は既に恐ろしいことを決めて準備をしていた。恐ろしいこととは、何度も門限を破る桂子に対する厳しい体罰として、桂子のクリトリスを切除するということだった。前日、クリ取りマスターの会社に連絡し、金曜日の午後5時から、切除者1人と押さえつけ役2人の派遣をお願いしていたのだ。夫に相談することもなく独断で決めたことである。父が聞いたのは昨夜遅くに帰宅してからである。当然、やりすぎだと抗議したが、普段家庭のことを妻に任せているからそれ以上は言えなかった。娘を守

ってやることもできない自分を嘆いた父は、せめて傷がいえたらどこかへ連れて行ってやろうと思うのだった。

翌日の金曜日、何も知らない桂子が帰宅した時、クリトリス切除の準備はすっかり整っていた。母は切除者が持参した契約書に自筆でサインをし、捺印した。更に経費を現金で払い終え、他の二人と共に押さえつけの手順を確認していた。桂子は居間に敷き詰められたビニールシートと、その上に置かれたクリ取りDXの道具一式、そして初対面の女性たちを見て立ちすくんだ。クリ取りDXの存在は桂子も耳にしたことがあった。テニス部OGの高校生がセックスをしたことが親にばれ、クリ取りDXを使用されたという噂があったのだ。まさかそれが自分の身に降りかかるとは予想だにしていなかった。

母は「お帰り。今から大切な儀式をはじめるから服を全て脱ぎなさい」とだけ言った。本能的に逃げ出そうとする桂子だったが、母が入り口側にいるのでどうにも出来なかった。ありったけの声をあげて嫌がる桂子に母は強烈なビンタを浴びせた。なおも大きな声をあげて床に倒れこんだ桂子に、母と他の2人がかけより、あっという間に制服を脱がしてしまった。ブラジャーだけになった桂子を引きずってビニールシートの中央につれて来た母は、自らもどっかりと腰をおろして足を広げた。その間に桂子を座らせ、足を大きく広げさせた。咄嗟に両手で股間を隠そうとする桂子だったが、母は二の腕を掴むと後ろで組ませてしまった。今度は必死に足を閉じようとする桂子を、二人の大柄な女性が片足ずつ持ちしっかり固定した。

大きく広げられた桂子の股間に、切除者の女性がしっかりと腰を

おろした。まだほとんど陰毛のない桂子は毛を剃る必要がなく、切除者は早速外性器全体を消毒した。消毒液が滲みて悲鳴をあげる桂子の口に、母は詰め物を押し込んだ。消毒が終わるとなれた手つきでピンセットを使い、皮の中から小さなクリトリスをつかみ出した。ピンセットの先がクリトリスに食い込み、桂子は声にならない声をあげて抵抗した。次の瞬間、詰め物があっても音が漏れるほどの大きな悲鳴があった。切除者がクリトリスを一瞬にして切り落としたのだ。わずか数秒の鮮やかな手つきだ。左手に持ったクリトリスを床におくとすぐさま止血に入った。薬がしみて、まだなき続ける桂子だった。それでも慣れた手つきの切除者は、クリトリス周辺にたっぷり塗り薬を含んだガーゼをあて、テープで止めた。

母と押さえつけ役の女性は桂子を持ち上げるとベッドへと運んだ。片付けを終えた切除者たちはすぐ帰っていった。それから水曜日まで、桂子は一歩も家から外に出られなかった。パンツをはくことさえ出来ず、トイレに行くたびに傷口がしみて涙をこぼした。学校がはじまった木曜日も行くことが出来ず家で寝ていた。その日、学校に行った母はテニス部の顧問に会い、「家庭内の理由」とだけ記して部活の休部届けを勝手に出してしまった。帰ってきてそれを聞かされた桂子は、またまた大泣きした。ただどちらにせよ、体育は来週一杯休まねばならない。クリトリスを切られたことがクラスでばれたら、と思うだけで桂子は怖かった。今は一刻も早く、脳天を突き抜けるようなこの痛みがいえてくれることを望むばかりである。

和美の悲劇

小学校5年生の和美には父親がいない。物心ついた頃には両親が離婚していた。原因は父親の女遊びである。離婚した時、和美はまだ1歳だったから父の顔も知らない。毎晩のように遊び歩いていた父の姿は5つ年の離れた兄ですら、ハッキリと記憶していない。

離婚した母は和美と兄を厳しくしつけた。遊びにふけって勉強しなかった時は漫画本を目の前で破り捨て、ランドセルをゴミ集積所に放り投げた。門限を破れば寒空の下3時間立たせ、嘘をついた時には夜遅くまで正座の罰を与えた。約束を守らなかった時は強烈なビンタを何発も食らわせた。前夫に懲りて、もう男など信じないと心に決めていた。再婚する予定もなく、子どもたちは自分が守るしかないと思っていた。父親のいない家庭の娘は早いうちに彼氏を作る傾向があり、男にだまされやすいとどこかの本に書いてあった。娘までが男にだまされたら大変、何としても娘を早熟にさせてはいけないと考えた。少し胸のふくらみも目立つようになってきたが、母はブラジャーを買い与えなかった。大人になっていくことを実感させたくなかったのだ。

和美が小学校4年生の時、クリ取りDXが開発された。クリトリス不要を唱えた学者の説に母は全面的な共感を示した。これで性欲を減退させることができるならばすぐにでも実行したいと考えた。しかし小学校4年生という年齢は少々早すぎ、また自分が切り取ることに不安もあった。近くに親戚もいないので、押さえつけ役を頼める人がいないのだ。翌年、母にとって朗報が入った。それはクリ

取りマスターの登場である。押さえつけ役も切除者もお願いすることが出来る、早速和美に施そうときめた。

切ってから1週間は痛みがひかないので、長期休暇の前でなくてはならない。母は5月連休の前日を設定し、会社に依頼した。切除者と押さえつけ役1人ずつがその日の夕方に訪問してくれることが決まった。そして和美と兄に、早めの帰宅をするよう促した。この時点で和美は何も知らない。それどころかクリトリスという名前も知らず、自らのものを見たこと・触ったこともなかった。まだ生理も迎えていないので膣も知らない。知ってることは、股の間に尿が出てくる穴があることくらいである。

いよいよ運命の日が来た。午後になると和美が、そして夕方には高校1年生の兄が帰宅した。その直後、クリ取りマスターたちが家に到着した。玄関で迎えた母は家の中へと手招きすると、和美と兄を呼んだ。そして突然、「和美、洋服を全て脱ぎなさい」と静かに告げた。いきなりのことに戸惑う和美だったが、「早くしなさい」という言葉に仕方なく服を脱いで畳んだ。母に裸を見られることは大して恥ずかしくないが、兄と知らない女性に見られるのは恥ずかしい。両手で股間を隠した和美に対し、母は仰向けで新聞紙の上に寝ることを命じた。股間を隠したまま足をしっかり閉じて仰向けになった和美の右足首を母がつかみ、一気に外側へ開いた。そして兄に命じて左足も同じように広げさせた。股が大きく開かれ、和美の女性器が母と兄にしっかり見えている状態となった。更に羞恥心を感じ、股全体を手で覆おうとする和美だった。

その時、2人の女性のうち、体格の良い方が和美の頭側に座った。

そして股間を隠していた手をつかむと胸の前におき、しっかり体重をかけた。これで和美の性器は部屋の中にいる全員に丸見えとなってしまった。「嫌だ~何するの？やめて~」と叫ぶ和美の口を、大柄な女性が押さえた。それまで無口だった母も「騒ぐんじゃない、静かにしなさい」と冷たく言った。状況が飲み込めない兄だけが、妹を心配そうに見つめていた。

もう1人の女性が和美の股間の間に座ると、よくしみる消毒液で外性器を拭った。敏感な性器を消毒され、和美は悲鳴をあげた。次に両手で小陰唇を開き、クリトリスの包皮をゆっくり剥いた。生まれて初めて和美のクリトリスは外気に触れ、痙攣した。ピンク色の小さな突起を、先の細いピンセットでつまむと力をこめて引っ張った。余りの痛さに和美は悲鳴をあげ、「痛いよ~やめて~何するの？嫌だ~」と叫び続けた。しかしそれも僅か数秒だった。切除者は右手のピンセットを左手にもちかえ、右手に鋭利な刃物を持つと、慣れた手つきでクリトリスを根本から切り落とした。上から下に、一度刃物を引いただけで小さなピンク色の突起は和美の体から離れ、新聞紙の上にポトリと落ちた。股から噴出する鮮血を、切除者は素早く止血薬で抑えた。これまたしみる消毒を施した後、数秒の間にガーゼでしっかりとめてしまった。

和美はもう人間とは思えないようなわめき声をあげて泣いた。見たことも触られたこともないが、とても敏感な部分に刃物が入れられ、いいようのない激痛に見舞われたのだ。力をこめて足を押さえていた兄も、気分が悪くなったようで部屋を出て行った。母だけが冷静で、クリ取りマスターたちに謝礼を渡していた。

和美がこの出来事について、母から聞かされたのはその夜のことである。勝手な理由で激痛を与えた母を恨んだが、どうにも抵抗は出来なかった。そしてその夜から排尿の痛みに悩まされるのだった。

聖子の悲劇

聖子が通うのは幼・小・中・高・大が同じ敷地内にあるという名門私立である。幼稚園の頃からこの学園に親しんでいる聖子には友達も多くいた。もっとも中・高だけは女子校となるため、学内に同世代の男子はいない。それでもこれだけの名門校となれば、近隣の男子校が何とか近づきのチャンスをうかがっているものだ。この春から高校1年生になる聖子も、中学2年の学園祭で声をかけてくれた3つ年上の彼氏と付き合っていた。彼氏は今年から大学に通うプレイボーイで、酒もタバコもギャンブルもといった問題未成年だ。聖子の家は代々続く神社で、神職にある両親は聖子を厳しく躾けてきた。厳しいだけではなくヒステリックであることが、思春期の聖子を苦しめた。自分のことは棚にあげ、何かと口やかましい両親を好きになれず、聖子は心にわびしさを感じていた。だから彼からの告白を受けた時は年上の男というだけでほれ込んだ。聖子の一挙一足を監視する両親は、すぐに恋人の存在を見破った。そしてそんなふしだらな男とは付き合うなと猛反対した。聖子は納得できず、両親にはあまり紹介しないまま付き合いを続けていた。

ある日、聖子は門限のことをめぐって両親と大喧嘩した。学校の人間関係もギクシャクしていた聖子は彼氏によりどころを求めた。時間さえあれば彼に会い、愚痴をこぼした。気持ちが晴れずイライラを募らせている聖子に、彼は何とタバコをくわえさせた。学校の近くにあるカラオケボックスで、自分が吸っているタバコを聖子に与えたのだ。さすがに聖子もこれはまずいと思ったが、彼への信頼と世間への反発から手を出してしまった。

しかし悪いことはすぐに見つかるものだ。たまたま同じカラオケボックスに中学の教師が友人と来ていた。聖子はトイレに行こうと廊下に出たところで、姿を見られてしまい、呼び止められた。制服を着ているから遠くからでもうちの学校の生徒だとわかってしまうのだ。教師は「お前、学校帰りに何をしてるのだ」と声をかけ、聖子が出てきた部屋に目をやった。そこにはタバコをふかす彼氏と、生々しく火のついたもう一本のタバコがあり聖子の制服からはタバコのにおいがかすかにしていた。こういう時、教師の勘というのは鋭い。言い訳のしようがなかった。

翌日、聖子は朝から生徒指導室に呼ばれた。そこには呼び出された父も同席していた。事実確認の上、その日から1週間の停学処分が言い渡された。父は娘を引きずるように家へ連れ帰った。家に着くなり父は聖子の頬に強烈なビンタを何発もくらわせた。続いて母は父の見ている前で聖子のスカートとショーツを剥ぎ取り、丸みを帯びてきた尻を靴べらで何回も叩いた。あまりの強さに聖子の尻には血がにじんでいた。しかし悲劇はこれだけで終わらなかった。午前中のうちに母は、クリ取りマスターに電話をいれて、夕方に来てもらえるよう頼んでおいたのだ。母は聖子を反転させると性器をつまみあげ、「あんた、罰として今日ここは切り落とすからね」と言い放った。聖子はクリ取りＤＸを使われるのだと直感したが、反発できないほど両親は怒っていた。誰かに救いを求めようと考えたが父はスカートのポケットから聖子の携帯を取り出すと、真っ二つに折ってしまった。更にメモリーカードも粉砕してしまった。もう彼とも連絡を取ることはできない。「切り取る準備が出来るまで部屋で反省してなさい」と母が追い討ちをかけた。部屋に戻ると、大切にしていた漫画本１００冊近くが本棚から消えていた。「漫画は没収したからね。あんなもの読む時間があるなら勉強しなさい」と言

った。部屋を見渡すと、彼と一緒に出かけたロックグループのライブで購入した大切なCDが真っ二つにされ、ポスターはビリビリに破かれ、パンフレットは引き裂かれていた。確かにいけないことをしたという自覚は聖子にもあるが、両親からのあまりに酷い仕打ちに涙がとまらなかった。

1人になった部屋で聖子は手鏡を使い、自らの性器をうつしだした。こうしてまじまじと見つめてみるのは保健体育の授業で習って以来だ。慎重に皮をめくると、小さな突起が出てきた。これがクリトリスだ、そしてこれを切ってしまう道具があると耳にしていた。まさか自分の身にふりかかってこようとは努々思っていなかった。次に呼ばれた時は既に準備が整っていた。両親は来訪した切除者と契約を交わし、謝礼を払った。そして倉庫にビニールシートを広げ、切除の準備が出来上がったところで聖子を呼びに来た。

薄暗い倉庫の中に入ると、聖子は仰向けに寝かされた。両親が足首を掴み、股を大きく開いた。聖子は押さえつけ役の女性にもたれかかりながら、ぎゅっと目を閉じて早く時間が過ぎることを願った。股の間にどっかりと座った切除者はクリ取りDXを広げ、まずは性器を消毒した。かなりの力で拭うから痛みを感じる。そして先の細いピンセットを使い聖子のクリトリスを包皮の中から強引に引っ張り出した。神経の塊を強引に引っ張られて「痛い〜」と泣き出す聖子を思いやることもなく、鋭利な刃物がクリトリスの根本付近にあてがわれ、2回ほど上下に引くとクリトリスは切り離された。切除される激痛に、消毒がしみる激痛が加わり、聖子は気を失っていた。

しかしこの痛みはまだ続くのだ。学校の停学処分があけるまで、

外に一歩もでることが出来ないほどの痛みだ。そして聖子は今後、「クリトリスの大部分を切り落とされている女性」として生きていかねばならないのだ。

菜々の悲劇

菜々は重い足取りで家へと向かっていた。今日は1学期の終業式で、鞄の中にはHRで返却された学期末テストの成績表が入っていた。勉強した割には出来なかったと感じてはいたが、もう少し順位が良いと考えていた。悪いといっても名門女子中でクラス40人中7位だから決して悪くはない。学年全体でも200人中31位と上位15%に入っているのだ。しかしこんな成績で母が許すわけはないと菜々はわかっていた。

小学生の時から母は徹底的に菜々を勉強漬けにした。学校が終われば週6日、スパルタ塾に通う毎日だった。菜々が通っている塾は体罰を宣言していて、宿題を忘れたりテストの点が一定ラインを越えなければ容赦なくビンタや正座が待っていた。友達と遊ぶことも許されずひたすら勉強に耐えた菜々だったが、第一志望の最難関校は残念ながら不合格であった。しかし第二志望校には見事合格した。ここも偏差値65を越える名門の女子校である。それでも心底納得しない母は、引き続きこのスパルタ塾に通うことを命じた。今度は絶対東大に入れると言い放った。学校の方針により部活動には参加しているが、それとて英会話部であるから息のつく暇もなかった。

菜々の家には基本的に安らぐものはない。テレビは居間に一つあるだけで、無断使用は禁止となっていた。ゲームには興味を示さなかった菜々ではあるが、それでも少女マンガには関心があった。しかし母は漫画の持ち込みを一切禁じた。万が一持ち込んだ場合は、理由・所有者を問わずその場で火をつけて燃やすといった。携帯電

話すら持たせてもらうことは出来なかった。

菜々の頭には1学期中間試験が返却された時のことがよぎった。成績を持って保護者会から帰宅した母から、激しい体罰を受けたのだ。服をはぎとられ、丸みを帯びてきた尻を靴べらで何度も叩いた。あまりに叩かれたので血がにじみ出てかさぶたになり、しばらくは椅子に座るのも億劫だった。中学1年生の時は全体で10位⇒7位⇒19位⇒12位⇒9位と推移した。クラスのベスト5には必ず入っていた。2学期中間試験でクラス5位・全体19位となった時も尻たたきの罰を受けたが、中学2年の1学期中間試験の後は更に回数を増やされたのだ。とはいえ前回の成績だってクラス5位・全体24位である。全体で10位以内に入るのが当然と言う母は更なる罰として菜々が大切にしているI－PODを没収した。学年10位以内になるまで返さない、もし今後これ以上成績がさがったら、こんなものでは済ませないと言い放った。

その直後、今までで最低の成績である。クラス内の上位5人をはじめて逃し、全体でも30位以内にはじめて入れなかった。どんなに母が怒るだろうと考えると足取りは自然と重くなる。しかも主要三教科の成績が振るわず、音楽や美術で点数を稼いでいるところもあった。更に間が悪いことに、菜々は昨夜、塾のテストをめぐって母から怒られていた。今朝もまだ機嫌が悪く、びくびくしながら家を出てきたのだ。

菜々が家に入ると、母が早速成績を見せるよう促した。恐る恐る成績表を差し出すと母は一つ一つの項目を丁寧に見始めた。びくびくとおびえた菜々には、母の表情が少しずつ険しさを増していくの

がわかった。母は厳しい顔で成績表を机におくと、ちょっとそこで待っているよう命じた。隣の部屋に行った母は、どこかに電話をかけた。戻ってくると、「明日の夕方、お仕置きをしてもらう専門家を頼めたわ。ちょっと懲らしめてやらないとね。思い知らせてやらないとあんたはわからないでしょ」と言い放った。更に「ひとまず今日もお仕置きはするからね。居間にいってパンツを脱ぎなさい」と言った。同姓も親とはいえ、菜々も中学2年生だから裸を見られるのは恥ずかしい。もう胸もふくらんできて陰毛が生えそろい、生理も迎えている思春期の少女なのだ。無論、この母にはそんな情けは全くない。

いつもどおり、母の前でパンツとスカートを脱ぎ、手で股間を隠しながら座布団の上へうつぶせになろうとした。その時、母は意外なことを言った。「今日は反対向き、仰向けになりなさい」仰向けということは股間を見られるということだ。しぶってなかなか体を反転させない菜々の尻に、母が強烈な一発を見舞った。あわてて飛び上がった菜々は体を反転して、股間に手をおきながら仰向けに転じた。母は股間を隠していた菜々の手を強烈に叩いた。あまりの痛みに菜々は手を離してしまった。菜々の股間に目をやった母は毛が生えそろっているのをみて憎憎しい表情を見せた。そしてハサミをもってくると、菜々の陰毛を短く刈ってしまった。続いて陰唇をつかんだ母は、ぐっと横に開いた。更に奥へ指を入れると、クリトリスの包皮を乱暴に剥いた。自慰の習慣がない菜々は初めて体験する外界の刺激にくすぐったさを感じた。母は「明日の4時からお仕置きするからね」とだけ伝えると、出て行ってしまった。

菜々は1人考えていた。しかし今日の母の行動を見る限り、股間に関係する体罰なのかと感じた。何をするのか、お灸でもすえられ

るのかと心配していた。その時、ふと頭の中をよぎったものがある。この世には恐ろしいクリ取りＤＸという道具があり、１人の友人がそれを使って母にクリトリスを奪われたという噂である。今日、母はクリトリスを丹念に見ていた。もしかして同じことをされるのでは、と菜々は不安だった。その嫌な予感は的中していた。母が翌日頼んだお仕置きの人とは、クリ取りＤＸを使用して少女のクリトリスを奪っていくクリ取りマスターなのである。

午後４時、３人組の女性が菜々の家を訪問した。まずは母が応対し、準備が整った所で菜々が呼ばれた。昨日、陰毛をそったのも準備の一つだった。部屋に入るとそこにはクリ取りＤＸが既に並べられていた。もう疑いの余地はなかった。菜々は哀れみの目で母を見て許しを請うたが、母は顔色一つ変えず、早く下半身裸になるよう命じた。

抵抗できない菜々が下半身裸になってシートの上に仰向けになると、屈強な女性が後ろから羽交い絞めにした。手首もしっかり持たれてしまい、上半身はどんなに暴れようとも逃げ出せない状態だった。更に大きく広げられた足を、もう１人の体格が良い女性と母がしっかり固定した。その間に入った女性が容赦なく菜々の性器をいじりはじめた。まずは消毒をして細菌を取り除いた。そして次の瞬間、右手にもったピンセットでクリトリスを引っ張り出すと、それを左手に持ち替えた。そして右手にもった鋭利な刃物でクリトリスをあっという間に切り落としてしまった。ピンセットでつかまれてから僅か１０秒ほどの時間であるが、菜々の痛みはあまりに衝撃的だった。激しく血がふきだして痛む股間を、菜々はさすりながら転げまわった。血が飛び散っていることに怒った母が強烈なビンタを頬にあびせた。ついさっき、菜々のクリトリスを切り落とした女性

はこれまた滲みる消毒薬付ガーゼをあてがうと、ぴったりと貼り付けた。

まだ泣きじゃくる菜々に対し、母は冷酷に言った。「この痛みをしっかり覚えておいて次は同じ過ちを繰り返さないように。いつまでも泣いてるんじゃない、少し休んだら来期に向けてすぐ勉強しなさい」こんな時でも母の頭から勉強の二文字は消えないようだ。